

令和5年度中学校武道授業（柔道）指導法研究事業



3人組で行う体落としの疑似体験

令和5年度中学校武道授業（柔道）指導法研究事業
〔主催＝日本武道館・全日本柔道連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁、協力＝練馬区立貫井中学校〕が、6月16日から18日までの3日間、講道館（東京都文京区）において、研究者12名、連盟事務局3名及び、練馬区立貫井中学校の生徒9名が出席して実施された。

10月に開催予定の第14回全国中学校（教科）柔道指導者研修会に向けて、安全かつ効果的な指導内容、留意事項などを明確にすることを目的に指導法発表、研究協議が行われた。

■1日目（6月17日）

開講式では、はじめに中里壮也全日本柔道連盟専務理事、永嶋信哉日本武道館振興部長が、それぞれ主催者挨拶を述べた。

開講式終了後、高橋健司研究者進行のもと、本研究事業の目的と、経緯を確認した。高橋進研究者は「毎年行われている研修会は、参加している方だけでなく私たち講師にとっても発見が多いものである。年々内容の充実が図られているので、研修会に向けて、本日は忌憚のない意見を頂戴したい」と呼びかけた。

その後、10月の研修会に向けて、検討課題の整理のため、講習内のグルーピングの方法や参加資格・募集の方法などの検討を行った。

向井幹博研究者は「これまでどおり柔道を専門としない先生方に参加してもらえるよう強く働きかけを行い、普段授業をやっていて困ったことや、これから実施していくうえで心配なことを解消できるような研修会にしていきたい」と述べた。

■2日目（6月18日）

2日目は課題別にグループ討議を行った。

まず初めに、向井研究者が礼法と転び方の指導法について説明し、研究者は各々の経験を踏まえて話し合いを行い、柔道の受け身や特性を学ぶことは、日常生

活において、ケガの防止や危機の回避、円滑な人間関係の構築につながってくるといった意見が出された。

なお、礼法の意義について田中裕之研究者より「武道は本来、命の奪い合いから来ているが、技能の向上のためには、相手がいないと成り立たない。人を殺めてしまう技能だからこそ一緒に稽古をしてくれる相手に感謝の気持ちを持たなくてはならない。こうした背景から武道では礼法を大切にしている」と説明があった。

続けて練馬区立貫井中学校の協力のもと、高橋健司研究者による基本動作の指導法を行った。柔道の用語や、技術構造を解説しながら、体さばきについて手や足運びの所作を一つ一つ指導した。

高品亮輔研究者の受け身の指導法では、後ろ受け身の際に勢いがつきすぎてしまうと、頭を打つ危険性があるので、しっかり体を丸めて行うよう解説した。

前瀧大吾研究者による膝車の指導法では、どうすれば効果的に相手を崩して、技をかけられるか、手首や足の動かし方に着目し、「腕時計を見る動作」・「受話器を取る動作」など、日常動作に喩えながら指導を行った。また、発展として、お互いに組み合った状態で回転移動をしながら合図で技を仕掛けるという遊びの要素を取り入れた指導法を紹介した。

山根友樹研究者による体落とし・大腰の指導法では、3人組で行う体落としの疑似体験による指導法の紹介があった。山根研究者は練習方法の意図として「体落としは強い力がかかる技ではあるが、非常に楽しい技の一つでもあるので、この技に怖いという印象を持たせないための工夫として行う」と説明した。

濱岡睦月研究者による固め技の基本と応用の指導法では、固め技脱出ゲームを行った。けさ固めのポイントを「ドアを開く」「シートベルトを締める」「足を非常口のマークの形にする」など、生徒がイメージしやすい言葉で説明した。応用編の簡易試合では、審判員の役割は礼法を選手に徹底させること、ケガをさせないことであると呼びかけた。

■3日目（6月19日）

まとめとして田中研究者は「今までは柔道を専門としない先生には柔道特有の仕組み・所作・技能の部分など、知らないことを教えなくてはならないと考えていた。しかし、ただ知らないことを教えるだけでなく、理解してもらうためにはそれぞれの先生が保健体育科教員としてももっている知見と、上手く結び付けられるような機会や伝え方が重要だと感じた」と述べた。

閉講式では木村昌彦研究者が講評を行い、全日程を終了した。